

宿利客員教授・運輸総合研究所会長 挨拶要旨

TTPU セミナー「新しいモビリティサービスの実現に向けて～日本版 MaaS を利用者目線で検証する～」

(2020年2月21日(金) 13:00～)

ただ今御紹介いただきました、当公共政策大学院で交通政策を担当しております、一般財団法人運輸総合研究所会長の宿利でございます。本日のセミナーは、東京大学公共政策大学院の主催で、運輸総合研究所と一般財団法人日本みち研究所の共催により開催しておりますので、このような立場からご挨拶を申し上げます。なお、日本みち研究所の理事長であります石田先生には、後ほど基調講演とパネルディスカッションのモデレータをお願いしております。

まず、本日は、ご多忙の中、また新型コロナウイルスの問題が懸念される中、多くの皆様に本セミナーにご出席いただき、また、ご講演者及びパネリストの皆様には、ご協力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。併せて、本日のセミナーの実施主体であり、私どもの教育・研究活動のベースであります公共政策大学院交通・観光政策研究ユニット/TTPU の活動に対し、日頃より格別のご支援を頂いている皆様に対しましても、この機会をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、先ほど高原院長より紹介がありましたように、当大学院において、2016年から私と長谷教授と共同で「地域交通政策研究」という授業を開講し、多彩なゲストスピーカーによる事例紹介と、ゲストの講師と学生、教師とのディスカッションを通じて、地域交通を持続的に確保・維持し、改善していくための政策のあり方について考察する授業を展開しています。最近の傾向として、特に昨年9月からの授業を受講した学生は、公共政策大学院の学生にとどまらず、法学・政治学、経済学、医学、工学、情報理工学、農学、心理学といった多様な研究科の大学院の学生が履修しており、また、この授業は東大の学生であれば誰でも希望に応じて出席が可能な形式にしておりますので、単位は取れないが地域交通政策について勉強したいという意欲溢れた学部生も毎回何人か出席し、授業はいつも高い問題意識と学習意欲にあふれたものとなりました。

本セミナーの会場にも、様々な分野の皆様にお越し頂いておりますが、今や地域の交通・モビリティの問題は、単に交通政策の範ちゅうにとどまらず、地域社会の維持・発展に関わるあらゆる分野と密接不可分に連動しており、地域社会の在り方を考える上で不可避の課題として認識されていることが明らかであります。

ところで、近年、特に「MaaS」と名がつけば、あたかもこれによって現下の交通問題、とりわけ地域交通の課題が一気に解決するかのような期待が寄せられている向きもありますが、もちろんそんな生易しいものではないことは、皆様先刻ご承知のところであります。

私見ながら、20世紀後半の我が国における陸上交通の歴史を振り返ってみますと、2つの大きな変革が見てとれます。1つ目は、1964年の東海道新幹線の開業とその後の新幹線ネットワークの拡大によって、都市間の高速度移動スタイルが定着したこと、2つ目は、ほぼ同じ時期からのモータリゼーションの進展による自家用自動車の普及が、地域内の移動のスタイルを激変させたことでもあります。

しかしながら、昨今のAIやIoT、ビッグデータを活用した、自動運転やMaaS等の新たなモビリティの進展・展開や、これらの動きと既存の技術との組合せや応用の取組の中に、将来地域の交通のスタイルが大きく変わる、新しいステージに移っていく可能性や期待を見出すことができることもまた確かであります。

本日のセミナーでは、日本版MaaSを利用者目線で検証するという視点から、考察を深めたいと思います。まず、先般地域公共交通に関する重要な法律改正を閣議決定し、国会に提出したばかりの国土交通省の瓦林公共交通・物流政策審議官と、国土交通省及び経済産業省の新たなモビリティに関する懇談会の座長を務められ、MaaSや新たなモビリティに関して最も造詣が深い石田東生先生に基調講演をお願いし、次にそれぞれの分野・取組の第一人者として、このテーマにチャレンジしておられる宮岡さん、西村さん、重松さん、加藤さんより、それぞれ講演をいただきます。その後、講演者の皆さんに、さらに重田さんと伊藤さんを交えてパネルディスカッションを行い、会場の皆様と共に議論を深めていきたいと思っております。

本日のセミナーが、ご出席いただいた皆様方にとりまして真に有益なものとなりますことを期待して、私の冒頭の挨拶といたします。

本日は誠にありがとうございます。